

司式:野呂 智子
奏楽:中井喜久子

前奏:「ほむべきかな、主の御名によりて来る者」(F. クーラン)

招詞:今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。(ロマ8:1)

讃美歌:こどもさんびか 25(『21』 24「たたえよ、主の民」)

交読詩編 1:1-3

01 いかに幸いなことか/神に逆らう者の計らいに従って歩まず/罪ある者の道にとどまらず/
傲慢な者と共に座らず

02 主の教えを愛し/その教えを昼も夜も口ずさむ人。

03 その人は流れのほとりに植えられた木。とぎが巡り来れば実を結び/葉もしおれることが
ない。その人のすることはすべて、繁栄をもたらす。

朗読聖書:マタイによる福音書 22:34-40

◆最も重要な掟

34 ファリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々を言い込められたと聞いて、一緒に
集まった。

35 そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。

36 「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」

37 イエスは言われた。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である
主を愛しなさい。』

38 これが最も重要な第一の掟である。

39 第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』

40 律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」

祈祷

天にいらっしゃる父なる神さま、あなたのお名前を褒め称えます。新しい週の初めの日曜日の朝、私たちを聖霊の働きによって教会に招いてくださり、ありがとうございます。今朝は、秋の全体礼拝として、小さな子供たちから大人まで、共に集って礼拝をお献げ致します。

信濃町教会の種が蒔かれ、礼拝が守られるようになって丁度 100 年の記念の年に、今、私たちは、この信濃町教会に連なり、礼拝をお献げすることが赦されています。この豊かな恵みに心から感謝申し上げます。

教会学校に通う子供たち、保護者の方々が、神さまの愛と恵みに充たされ、「私の教会、僕の教会」、という思いを持ちつつ、神さまを見上げながら、心も体も豊かに成長していくことが出来ますように、神さまが子供たちの行く道を照らし導いてください。

この一週間を振り返る時、私たちの歩みは神さまの思いから遠く離れて、神さまが悲しむようなことをしたり、言ったり、思ったりしてしまいました。自分の事ばかりを考えて周りの人を傷つけてしまったこともありました。罪深い私をどうぞお赦しください。どうぞ、神さまの御言葉に触れ、悔い改めて、新たな気持ちで一週間を迎えることが出来ますようにお導き下さい。

本日、聖書の御言葉を取次いでくださる佃先生、鮎川先生をお与えくださり、ありがとうございます。先生方を聖霊で充たし、神さまの御言葉を大胆に語ることが出来ますようにしてください。また聴く私たちも心と耳でお話を聴くことが出来ますようにしてください。

地震のため、戦いのため、大きな苦しみと悲しみの中にある方々を覚えます。神さまの平和が、この世で実現しますようにと、心からお祈りいたします。また私たち一人ひとり出来ることを気づかせ、祈りを合わせ続けることが出来ますよう導いてください。

今日の礼拝を覚えながらも、様々な事情で礼拝に集い得ない方々を、その場その場にあって相応しい恵みで充たしてください。このお祈りを主イエス・キリストの聖名によってお献げ致します。アーメン。

讃美歌:こどもさんびか 4(『21』 6「つくりぬしを賛美します」)

こどもへの説教「心にとめる」

鮎川健一

昨日は夏のように暑く、今日は雨降りでちょっと寒いような感じがしますが、皆さんの体調はどうでしょうか。体調を守る、健康を守るといって、何かしらやらなければならない、決まりを守るとか、いろいろなことがあると思います。寒い時に裸で過ごしていたら風邪をひくでしょうし、暑ければ暑いなりに冷たい物を食べたり飲んだりすればお腹を壊すなど、いろんなことがあるかも知れません。皆さんは色々のところで毎日何かしら気を付けて過ごしていることと思います。日曜日の礼拝のことを考えると、礼拝の時間、献金の準備などしてこの時を迎えていることでしょう。心のどこかでいろいろなことを考えながら、「自分はどうかいいか」と考えていることでしょう。ですが、その一つひとつを考えて行っても、「なかなかできない、忘れてしまう」、そんなことがあるでしょう。そうこうしているうちに、おうちの「決まり事」だったり、近所の人たちとのつながりで守らなければいけない事があるのだが、それもなかなかできなかつたり、忘れてしまつたりということがあってもいいかも知れません。そうすると、幼稚園に行ったら先生に怒られる、小学校もそうです。「決まりを守っていない、宿題を忘れた」ということになる怒られたりもします。また病院に行けばお医者さんから色んなことを注意されたり、薬を飲み忘れれば怒られもするなど、色んなことがあると思います。家の中でも「決まり事」はあって、それぞれの家で違うかもしれませんが、なかなか難しいこともあるかも知れません。そんな時に、周りの人たちに迷惑をかけてしまう、家の人に心配をかけてしまうことがあります。私たちはそういうことを完璧には出来ないということがあります。中にはそういう「決まり事」が気持ちよくできなくて、忘れたふりをする、ズルをするとか、敢えて守らない、そんなことにもなつたりしますが、皆さんはどうでしょうか。

今朝の聖書のお話しも、ここで厄介な話があるのです。イエスさまに、「決まり事」を守っているかどうか、ということ、敢て、意地悪く聞こうとする人たちがいるのです。ここでサドカイ派やファリサイ派と言われる人たちが、イエスさまがユダヤ教としての決まり事を守っているのかどうか。どこか違うことをしていたら懲らしめてやろうと思って、敢えて、いじわるな質問をするのです。それなら自分たちはそれを分かっているかと言えば、それもどうなのかなというところですが、このような事があるのです。ユダヤの律法というものがあってそれを守っていない人々をファリサイ派やサドカイ派の人たちが見つけたら、引き摺り回したり、石を投げて懲らしめていたのです。イエスさまも彼らから狙われていました。そういう中で、「こういう質問だったら彼はどうか答えるだろうか」、「決まり事を破るだろうか」と、必死になって監視していました。このユダヤの人たちはイエスさまをよく思っていない人たちもいて、それで質問をしたのです。「自分は決まりを

守っている、正しい”、そう思っているからこのような質問をするのです。

イエスさまはどう答えたか。これがまたきついのですが、答えるというよりは、質問に質問をかぶせたのです。“いろいろ守ることがあるかも知れないが、一番大事なことをあなたたちはしていません。”それは“あなたたちは神さまを思っていますか？”“主なる神さまを愛していますか？”ということです。それを言われたら、どうするかということですが、確かにそういうことは分かっている、ですが、分かっているのと出来ているのは違うのです。イエスさまがおっしゃるのは“天の父なる神さまのことを忘れて、色んな決まり事を守っていても、それはダメですよ”ということなのです。日常生活をしっかりと送っているかもしれないが、それは神さまを思っているなかでのことでしょうか、ということなのです。

こう言われたサドカイ派、ファリサイ派の人たちは余計イライラするのです。そして更に言われたのは、“神さまのことを思っているなら隣人のことも思いなさい”ということでした。彼らの行動は、神さまのことは思っているも隣人はどうであろうか。矢張り決まりを守っていない人たちを引き摺り回すほど、“自分たちは正しい、周りの人たちは間違っている”ということを常に、毎日、随分と暇な人だと思おうのですが、思っている。いずれにしても、“、というのであれば、もっと神さまのことを愛しなさい”、ということなのです。

この“気付き”ですが、「隣人」ということ、自分の周りにいるいろいろな人々や、隣に住んでいる、隣に座っているというのではなく、この地球上にいる人々皆のことを指している、どんな考え、どんな生活をしていたとしても、それが「隣人」と言われる「隣人」なのだということです。今日もここまで来る間、色んなことがあったと思います。その人たちとの係わり、その人たちと隣にあって皆さんはどう思っていたか、ということになります。手助けができなかったということもあります。電車に乗る前、反対側ホームで転んでしまった人、車いすで困っている人、助けに行かない、そういうこともよくある。どうしたらいいか、“神さま赦してください”、と言わざるを得ない、言うしかない、“神さま何か助けてください”と。そうしたら、その人の隣にいる人が何か手助けする必要があるのではないかなと思うのです。“何かしようとしても私たちには出来ることと出来ないことがある。でも神さまを思うのであれば、隣りの人を思いなさい。”と言っているのが今日の箇所です。一人ひとり、出来る・出来ない、いろいろありますが、神さまが一人ひとり、守ってくださっているということであれば、そのことを思いながら「隣人を愛しなさい、思いなさい」ということを伝えている所です。

8月の全体礼拝の最後に、私が伝えたことをもう一度、確認したいと思います。「世界中に祈りの家、キリストの教会があります。私たちは教会を強盗の巣にはなりません。教会は私たちのものではなく、神さまのものです。教会は神さまが褒め称えられる場所です。教会に招かれている私たちは、神さまの救いの恵みが沢山のの人に伝えられるように、礼拝を共にできる日の来ることを願っています。」そのことをお伝えしました。「隣人」というのは、そういう人たちが一緒に神さまを思うことが出来るようにと祈っていくことも大切な事と思います。

私たちはイエスさまによって与えられたこの日、この命、この祈りの家に招き入れられている、そのことを感謝するとともに、多くの人たちがイエスさまを思い、神さまを思い、毎日、いろいろ大変な中でも助け合っ生活できるように私たちも努力しながら、祈り求めながら、皆がそうできるように祈っていきなさいと思います。お話は終わります。

祈りましょう。

天の父なる御神さま、この時を与えられ感謝致します。これまでの暑い日もようやく涼しくなり秋の季節を迎えます。それでも天気の変化で、海に山に、また田や畑でも作物の実りに困ることが起きています。日本だけでなく世界の多くの人たちが同じように苦しんでいます。どうか神さま、この世界をお守りください。神さまの思いで充たされますように、私たちも神さまの思いを大切に、神さまに喜ばれる生活ができますように。

ここに来られなかったお友だち、ご家庭の方々にも、神さまの祝福が届きますように。世界の人たちに神さまの思いが届きますように。

このお祈りをイエスさまのお名前を通してお祈りいたします。アーメン。

讃美歌:487「イエス、イエス」

説教「神を愛し人を愛す」

佃 雅之

私たち人間は、或る時生まれて或る時に死にます。死んだらどうなるのでしょうか。キリスト教では死者の復活ということを神が約束してくださったこととして語りますが、今日、ここに集まっている私たちは、まだ誰も死を経験したことがありません。今日は『マタイによる福音書』の 22:34 から読みました。この箇所は今日の箇所の一つ前 23 節から始まっています“復活についての問答”の続きです。23 節以下でキリストは、サドカイ派の人たちと復活について議論されています。サドカイ派も今日の箇所に登場するファリサイ派も、どちらもユダヤ教の信仰者ですが、サドカイ派は“復活はない”と言い、ファリサイ派は“復活はある”と考えていたと伝えられています。聖書の教えについてもサドカイ派の人たちは“『モーセ五書』だけを重んじて、律法に書かれていない事は問題にしない現実主義であった”と言われていました。モーセ五書というのは旧約聖書の始めに置かれています『創世記』『出エジプト記』『レビ記』『民数記』『申命記』のことを指しています。この五つの書物には復活のことは書かれていませんから、彼らは“復活はない”と考えていました。“人は土の塵から造られたから土の塵に帰っていく。死んだら終わり。それが人間だ。”と理解していたようです。信仰を持ちながらも、極めて現実的に生きようとしたのが“サドカイ派”と呼ばれる人たちです。サドカイ派に対して“ファリサイ派”は、モーセ五書だけでなく聖書に書かれていることをすべて重んじていましたから、“復活もある”と考えていた人たちです。しかしファリサイ派の考える死者の復活は、“人はたとえ復活したとしても、同じ肉体を持ち続ける、いわば、地上の命の延長”と考えていました。しかしキリストは違います。今日の箇所の少し前 30 節で、「復活の時には、天使のようになる」と言われています。神の言葉を信じ、神の言葉に従って歩むことの出来る人は、神の恵みと、神の力と、神の愛によって天に属する者として戴けるということです。今の私たちには、考えることもできないような、想像することもできないような全く新しい命が神の力によって興されるのです。ただし、復活の命、永遠の命は生きている、生かされている今この時と非常に密接な事柄です。今与えられている地上での命とどのように向き合うのか、日々をどのように生きたなら、天国へと招き入れられ、復活へと導かれるのか。今日の箇所は、そのことをキリストが教えてくださっている箇所です。

ファリサイ派の人たちがキリストの所に集まって来ました。その内の一人、律法の専門家が、「律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」とキリストに問いました。律法の基礎になるのは神がモーセに与えられた『十戒』です。神はエジプトで奴隷にされていたイスラエルの民を導き出し、救いの恵み

に生きる道として 10 の掟を与えられます。そしてその十戒から派生して多くの掟が作られて行きました。結果、“こうしなさい”という命令の掟が 248 個、“これをしてはならない”と言う禁止の命令が 365 個、全部で 613 もの掟があったと言われていました。613 もの律法を正確に記憶して、そこから何が最も重要なのか順序付けることは、律法を知り尽くした専門家であれば答えられない最も難しい問題だとされていました。613 ある掟の中で何が最も重要であるかという難題を律法の専門家はキリストに尋ねたのです。キリストを試み、キリストを追い詰め、自分たちこそが律法の権威の下にあることを示したい、キリストを陥れ、自分たちに従えと言いたいわけです。しかしこの問いは、私たちにとっても重要な問いであります。聖書には数多くの教えが書かれています。いったい何が最も重要なのか、私たちも知りたいと思います。聖書的事ばかりではありません。私たちの日常には数多くのルールがあって縛られています。教会にも数多くの規則があります。誰もが“あれをしななければならない”“これはしてはいけない”といったものに縛られているのではないのでしょうか。そのような日常にあって“私たちは何をすればよいのか”“どのように生きたら永遠の命が与えられるのか”、“最も重要な事とは何か”、という問いは私たちの生き方を尋ねているものでもあるのです。

たとえ悪意を持った問いであったとしても、神の御計画の中で用いられるということがあります。神の御計画の中で、聖霊の働きによって万事が益となることに働くものがあるのです。律法の専門家からの問いに対してキリストは『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』と言われました。この言葉は“献げ尽くす愛”を意味しています。自分の全てを献げて神を愛するということがどういうことであるのかを身をもって示してくださったのがキリストです。一切の見返りを求めず、私利私欲を捨て、ただ主の御意思に身も心も、魂の全てを委ねて、神の栄光を顕すためだけに生きられたのがキリストであります。

キリストは言葉を続けます。39 節「第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』」、この主の言葉で見落としてはならないのは、“ただ隣人を愛しなさい”とは言わず、「自分のように」と言われたことです。私たちは隣人を愛するためにはまず自分を愛するということを知らなければなりません。自分を愛することが隣人を愛するための基礎であるからです。私たちは正しく自分を愛することが出来ているのでしょうか。自分自身を愛することも、隣人を愛することも、どちらも簡単なことではないように思います。なぜなら、愛というものは誰かに命じられたからといってできることではないからです。愛は内から溢れ出るものです。“愛されたという経験から、その愛に対する応答として生ずるものだ”と言われていました。愛のみが愛を呼び起こすことが出来るからです。私たちは自分を愛し過ぎる時、他者と共に生きることの必要性を忘れて、自己中心的な思いに陥ってしまうことがあります。反対に自分を愛することが出来なくなってしまう時、自分という存在を否定し、卑下して、自分が神に愛されていることを忘れてしまうのです。神は私たちを愛してくださっています。礼拝を通して私たちは神の愛を知ることが出来ます。神の愛は、或る時には私たちを戒めて、或る時には励まし慰めてくれます。礼拝を通して私を愛してくださる神に出逢うこと、神の愛に触れること、そして神の愛を感謝して戴くときに、私たちは自分を愛することが出来るものとされていきます。その上で、隣人を愛するというを具体的にを行うためには決断が求めら

れます。“キリストと共に生きようとする、キリストに倣い共に歩む”という決断です。

教会では『隣人』という言葉をよく耳にします。聖書が『隣人』と言うのは、私たちにとって大切な友だちや家族のことだけを言っているのではありません。『隣人』、ギリシャ語の「πλησίον(πλησίον)」という言葉は、この言葉自体に『偶然出会う人』、国籍や宗教に関係なく『あらゆる人』という意味が含まれています。

今日は説教の冒頭で、復活についての議論を持ち掛けたサドカイ派の人たち、そしてキリストを試そうとしたファリサイ派の人たちのことに触れました。キリストは彼らが悪意をもって近づいてきても、意地の悪い問いにも向き合ってくださいています。福音は全ての人のものであるからです。キリストは反対者が現れて意見の食い違いが生じたとしても、その隔たりを決定的なものとは為さしません。今はまだ神の愛が分かっているからです。それでもいずれ分かる時が来るであろうことに希望を持っているからです。神が御力を示され、全ての人が悔い改めに導かれる時が必ず来ると信じて疑わないからであります。私たちの罪を赦し、救ってくださった神が、今は福音に反対する人にも、信仰を告白することが出来ない人にも、何時か必ず救いへと招いてくださることを信じる、神の恵みと、神の力と、神の愛を信じて祈ることが赦されているのが私たち信仰者であります。

「律法全体と預言者は、この二つの掟」、つまり、“神を愛し、人を愛することに基づいている”とキリストは今日の個所の最後に語りました。「律法」は、神が人間にお与えになった救いの約束の言葉です。「預言者」は、神の口となって御心を告げて神に従うことを求めた人たちです。つまり、神の御心を顕す聖書の教えの中心がここにあるということです。聖書の言葉の中には、ちゃんと神の愛が詰まっている。律法も神の愛を土台とした戒めであり、命令である。律法を通して恵み深き神に導かれることが如何に大切なことであるかと語られたのです。

「基づいている」訳されている言葉は、聖書の書かれたギリシャ語では「吊るす、ぶら下がる(κρεμάννυμι)」という言葉が使われています。この言葉は、十字架にかけられた人を指す言葉です。十字架のキリストを仰ぎ見たなら、神を愛し、隣人を自分のように愛するとは、どのような生き方であるのかが分かるということです。

神は今も、キリストによって示された愛を注いで、私たちが主に立ち返ることを待っておられます。“自分はクリスチャンになるような立派な人間ではないから、聖書をちゃんと読んだこともないからクリスチャンにはなれない、もう少しきれいな心が持てたら教会に行こう、もう少し敬虔な気持ちになったら神に従おう”と言っている人は、何時になっても神に近づくことが出来ません。神は、今、私たちがあるままの姿で、ご自分に近づいてくる時を待っておられるのです。

神の愛への私たちの応答は、日曜日の礼拝を重んじて、私たちがキリスト前に立つことから始まります。主の日の礼拝が私たちを永遠の命へと導きます。今の生き方が変えられていきます。死んだらどこに行くのか、私はどうなるのか、思い悩むことが無くなります。神の愛を知れば、復活の命を、永遠の命があることを信じる事が出来ます。キリストが十字架に架かってくださったのは、私たちを、神を愛し隣人を愛する者へと変えるためです。この信仰によって救われた私たちは、キリストを通して顕された神の愛に応え、地上での日々を共に歩み行きたいと切に思います。

お祈りを致します。

聖なる神、あなたが独り子キリストを十字架に架けてくださるほどに、私たちのことを愛し、赦し、招いてくださっていることを感謝致します。全てを献げてあなたを愛し、人を愛したキリストの下に立ち返り、悔い改めて、私たちも全てを献げて、あなたを愛し人を愛することが出来るように聖霊が執り成し導いてください。あなたを褒め称え、感謝して、喜んで生きることが出来ますように。

主なる神さま、愛する姉妹をあなたの御許へと送ります。姉妹が今もあなたと共にあり、永遠の命を与えられ、復活へと導かれますように。ご家族を慰め、ご家族を主の道へと招いてくださいますようお願い致します。

私たちの救い主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讚美歌:こどもさんびか119(『21』507「主に従うことは」)

献金

感謝の讚美歌:65-2「今ささげる」

感謝の祈り(別紙)・主の祈り

派遣:讚美歌88「心に愛を」

祝福:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告:会員消息:昨19日早朝、久保和子さんご逝去。葬儀24日(木)13:30礼拝堂で執行(葬儀の辞:佃)、その前11:30於和室 納棺式(式:鮎川)、主の御腕の中で平安がありますように、関係、近親の方々に主の慰めが豊かにありますように。委員会案内①修養会グループ懇談会参加申込、昨年度報告号来週発行見通し。②伝道:チラシ11/17「左近豊:秋の特別伝道礼拝」と拡大求道者会。③教会学校;全体交流会次第について。

後奏:「後奏曲」(L.N.クレランポー)